

書 評

天 野 敬 太 郎 編 日本マックス・ヴェーバー書誌 第2版 新泉社 昭和47年1月刊 162 p.

細 川 元 雄*

I

マックス・ヴェーバーの研究者でない私が大先輩の天野敬太郎氏の労作「日本マックス・ヴェーバー書誌」を紹介することは光栄であると同時に烏滸がましいことだと思う。本誌の書評欄をかりて、私は同じ社会科学における書誌編集者の立場から日頃の問題を本書にぶつけることによって、編集者天野敬太郎氏と本書の利用者からご教示を引き出だそうとすることである。

天野敬太郎氏は、半世紀を図書館人として、この道ひとすじに歩みつづけておられ、昨年のお古稀が祝いされ、氏を敬愛する人々によって記念論文集¹⁾が刊行された。これによって氏の仕事と人柄を十分に知ることができたことは、同じ道を歩む私たちに大きな光明となっている。本書は、氏の数多い仕事の山脈²⁾から言えば河上肇、古典派経済学者、そしてマックス・ヴェーバーという人物書誌を通じてのわが国の社会科学における書誌活動の偉大な貢献である。

本書は、宮中市子編「わが国におけるマックス・ヴェーバーの文献目録」（本書アイテ

ム・ナンバー13、以下数字のみで示す）を源流とし、昭和40年ヴェーバー生誕百年を記念して上記目録を全面的に改訂増補し、天野氏の「日本マックス・ヴェーバー書誌」（24）として生れたのが最初である。翌41年第2回（25）の補遺が発表され、昭和44年に増補版が『マックス・ヴェーバーの思想像』（1424）の別冊付録として出版され、さらに最新年（昭和45年末まで）の追補を収めた第2版が本書として独立に刊行された。天野氏は、「昭和39年から編集を始め」（本書「まえがき」）られ、昭和41年の第2回には注目されるべき「日本におけるマックス・ヴェーバー書誌の発達」を付記され、書誌としての完璧さを目差されるなど本書によって氏の精進と苦勞の跡が窺える。本書は、本文二段組み（論題・筆者を8ポ、書誌的事項7ポ、註記6ポ）、掲載文献1736点、書評と重出などを加えるとA5版142ページにぎっしりと2,000点に近い文献が掲載されている。

「ここ十数年間にわたるマックス・ヴェーバー研究の蓄積を考えると、国内においても国外においても、その多量性と多岐性とは一驚に値いするほどのものがあり、社会科学

* ほそかわ もとお 京都大学経済学部調査資料室

1) 天野敬太郎先生古稀記念会「図書館学とその周辺—天野敬太郎先生古稀記念論文集」、昭和46年。

2) 「法政経済社会論文総覧」にはじまる索引類と「図書館総覧」にはじまる図書館学、さらに人物書誌として外国文学と社会科学とに分けることができる（前掲注1所収の著作目録参照）。

の領域においては、かつてマルクスの占めていた位置にとって替るかの感をさえ抱かせるほどである」³⁾と言われるように、今日のヴェーバー研究の盛況に本書は大きな役割を果たすことになる。本書収録の文献は、ヴェーバーの著作の翻刻と邦訳、それにわが国におけるヴェーバー研究文献とである。わが国のヴェーバー関係文献は、「マックス・ヴェーバーを中心に論述したものを主とし、これに他の学説を併せて論及するもの」⁴⁾であり、外国のヴェーバー研究の邦訳と日本の研究者で外国語で書かれたものの一部とが含まれている。収録文献は、ヴェーバー自身の研究領域によって、A総記、B方法論、C社会学、D法学、E政治学、F経済学に大別し、その中を重点的に5～6項目(Dは項目なし、Eは2項目)に分類し、原典、邦訳、解題そして研究との区分によって年代順に配列してある。本書には原書名索引、明治大正期年月順索引、邦人と欧人とに分けた筆者索引が付され、「主題による、筆者による、年代による……三方面から探索のできる」⁵⁾書誌となっている。

本書の特徴は、まず論文集だけでなく個人の研究書、雑誌論文の一部にまで内容目次を掲載していることである。これによって研究内容をより分かり易くするとともに、研究者の一つの発表形式である論文→研究書という系列が初出の箇所(最初の論文)で知ることができることである。しかし研究書の章・節となっているものが、研究書の箇所で見つからないのは少し不便であり、これと関連して同一文献が二重、三重に掲載され、アイテム・

ナンバーを付されてので筆者索引が大塚久雄氏の例では100点にのぼり何としても不便ではないだろうか。第2の特徴は、「標題で判じ難いものなどには、『註』を記すことに務めた」(本書「凡例」)といわれる註記事項である。註記は、簡単な内容表示だけでなく相互参照、増補・加筆などの事項、さらに外国研究者の邦訳の場合に原書名などが丹念に記され、天野氏の文献調査の苦心が滲みでている。なお1487の細谷氏の方法論的立場の註記は全体からみて逸脱感をまぬがれない。本書の第3の特徴は、研究書に対する書評、新刊紹介が収録してあることである。書評の重要性や書評索引の必要性が感じられている折から、研究者に非常な便益を与えることになる。なお、1420、1421、1424、1425のそれぞれに「新刊紹介」として飯田鼎氏の「最近の『マックス・ヴェーバー研究』を読む」が掲載されているが、飯田氏のこの論文は「学界展望」として書かれたもので、312と同じく一論文として収録されるべきではないか。

かくしてわが国のヴェーバー研究文献の多量性と多岐性が天野書誌によって見事に捉えられている。すでにふれたように本書は既存のヴェーバー書誌の検討と天野氏の書誌学の研鑽と相俟って、主題別書誌分野での記念すべき労作となっているとともに氏の河上肇書誌と並んで、広く社会科学研究者の座右の書となるであろう。

II

先達の師の成果を前に、私たちはここから何を学び、何を発展させていくのか。今日参

3) 有賀弘, R. ベンディックス・G. ロス共著学問と党派性, 「学燈」第68巻9号, 昭和46年9月, 75ページ。

4) 天野敬太郎, 日本マックス・ヴェーバー書誌第2回, 「関西大学経済論集」第16巻1号, 昭和41年4月, 97ページ。

考図書の書評の未発達⁶⁾、書評の「精神的前提」⁷⁾に欠くという声を耳にし、また天野氏の図書館学の成果に十分ふれずに、あえて天野氏の主題別書誌の最新の成果を前に私は一つの問いを発することをお許し願いたい。問題は一口に言えば「研究史と書誌の間」である。

社会科学分野における西欧の思想家たち（アダム・スミス、カール・マルクス、マックス・ヴェーバーなど）のわが国への導入・受容・研究の特異性を考えるとき、これらの文献の多量性と多岐性を調査し、整理する書誌活動が十分な役割をはたすことができるであろうか。私のささやかな経験と本書が日本におけるマックス・ヴェーバーの書誌であることによって、この問いは私から離れないものとなっている。丸山真男氏（301）、内田義彦氏（304）、住谷一彦氏（294、305）などのヴェーバー研究史の動向にふれ、そこで感じること、天野氏がヴェーバーを中心に論述した「直接文献」を基準として「厳選」され、このことによって本書に収録されなかった文献に研究史としては見落とすことのできないものがあるのではないかということである。丸山氏は、「私個人はヴェーバーから、無限の学恩を被っているつもりでおりますが、ヴェーバーをテーマとした論文を、かつて一度も書いたことはありません」⁸⁾と言われ、逆に住谷氏は「大塚氏のヴェーバー理解にいろいろ

ろな意味で影響を受け……相互にさまざまな研究上の交通をみながら、丸山真男、川島武宜両氏のヴェーバー理解が開花してまいります」⁹⁾とわが国のヴェーバー研究史に重要な人物として登場させ、丸山氏の「労作『日本政治思想史研究』を貫ぬくライト・モティーヴである自然から作為へという問題視角のうちに、ヴェーバーが『資本主義の精神』論において展開している方法の影響をさぐりだしてみようということも十分に可能かと思われます」¹⁰⁾と言われている。すなわちヴェーバーを「下敷き」にしたもの、さらに研究テーマのうちに「ヴェーバー的問題」を含んだ研究があらわれることであり、これが天野書誌においては収録されないものとなることである。

文献調査を通じて、研究史にふれ、かくして一定の形式のもとに目録化することを天野氏は次のように言われる。「そもそも、文献の検索の手がかりには、主題による、筆者による、年代による、の三つの場合がありうる。書誌においても、そのうちの一つだけでなく、三方面から探索のことができることが望ましいのである」¹¹⁾。主題、筆者、年代の三つの検索可能性は文献調査上同列でなく、それぞれの特性をもっている。書誌形式においても、本体を主題とするか、年代とするか（筆者を本体とするのはこの際論外として）は、本書に即して言えば、ヴェーバーを通じての

5) 天野敬太郎、前出、126ページ。

6) 長沢雅男、参考図書の書評「Library and Information Science」No. 9, 昭和46年参照。

7) マンハイムのエピソード～書評の「精神的前提」、「みすず」第142号、昭和46年6月参照。

8) 丸山真男、戦前における日本のヴェーバー研究、大塚久雄編「マックス・ヴェーバー研究」, 昭和45年, 151ページ。

9) 住谷一彦、日本におけるヴェーバー研究の動向、大塚久雄編「前掲書」, 177ページ。

10) 住谷一彦、前掲論文, 177-178ページ。

11) 天野敬太郎、前出、126ページ。

理論史を主とするか、あるいは思想史を主とするか書誌自体に語らせるということではないであろうか。天野氏が本書によって選ばれた収録文献は、日本におけるヴェーバーの思想史的研究をいわば「編集目的」とされたことであり、本書B以下に分類された研究文献がそれぞれの分野でヴェーバーを通じての

理論史を十分に反映するものではないのである。ヴェーバー「間接文献の採録が相当に多い」¹²⁾馬場明男、斎藤正二、佐久間淳編『マックス・ヴェーバー文献目録』(27)が年代別を書誌本体としていることにヴェーバー研究史を読むという独自性を感じさせるのは私一人であろうか。

12) 天野敬太郎, 前出, 127ページ。

金融事項参考書 大蔵省理財局編

マイクロ・フィルム ￥ 125,000

写真複製版 ￥ 750,000

東京経済雑誌 vols. 1~85

1879~1923 (終刊)

付・目次総覧 6冊

マイクロ・フィルム ￥ 600,000

写真複製版 ￥ 4,250,000

東京経済雑誌目次総覧

A5判 写真複製版 6冊 ￥ 60,000

欠号補充承ります

株式会社 勉 誠 社

東京都目黒区大橋 2-12-16 電話 (03) 460-9761